様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１４
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｈ００７８３

研究課題名（和文）近代日独の社会学説と高等教育との相互作用に関する学際的研究―新発見資料による―

研究課題名（英文）Interdisciplinary Study on Interaction between Social Theory and Higher Education in Japan and Germany 1871-1945: Based on Newly Found Material

研究代表者
野崎　敏郎（Nozaki, Toshiro）

佛教大学・社会学部・教授

研究者番号：４０２５３３６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　9,300,000円

研究成果の概要（和文）：　マックス・ヴェーバーの理論形成をめぐる主要な論点、カール・ラートゲンの日本における足跡、ヴェルナー・ゾンバルトの資本主義論をめぐる付帯状況、大塚久雄の戦前期の言説など、日独の社会学説に関する未解明の諸問題に取り組み、それぞれ重要な新知見を得た。これらの調査研究にもとづき、十九世紀末から二十世紀前半にかけて、ヴェーバー他の社会科学の若手新潮流が、焦眉の政策課題と結びつきつつ、旧世代の歴史学派の業績を批判的に受け継ぎ、新たな社会研究方法論を確立しつつあったことを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　従来、十九世紀末から二十世紀前半にかけて活躍したドイツ社会科学の若手新潮流と、グスタフ・シュモラーらの旧世代の歴史学派とは、対立関係にあったと考えられており、またそれぞれの論者の著作上の論争に関しては、研究者の視野に入っていた。しかし、本研究課題の遂行によって、いわば水面下で、旧世代と新潮流との学的交流が旺盛に展開されていたことが判明した。また日本におけるドイツ社会学説の受容は、たんにドイツで台頭してきた学説の紹介であるに留まらず、日本人社会科学者たち自身の社会的政策的問題関心にもとづく主体的摂取であったこと、またそれにたいして、ラートゲンらが直接指導していたことが判明した。

研究成果の概要（英文）：We researched important aspects of theory building by Max Weber, Karl Rathgen, Werner Sombart and other new theoretikers in Germany from late 19th to 20th century, and aspects of works of their following sociologists and economists in Japan. We found new knowledge about their works and activity, and clarified how Weber and other german theorists, who belonged to younger generation of historical school of economy, built new methodology of social science, when they took over their predecessor's work critically, and tried to combine their theory with urgent political matters in Germany.

研究分野：歴史社会学

キーワード：日独学術交流史　日本社会思想史　ドイツ社会思想史　日本の大学史　ドイツの大学史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

## １．研究開始当初の背景

本研究課題の研究対象は、従来のいわゆる「御雇外国人」にかんする研究が扱ってきた対象と重なっている。しかし、従来の研究は、ともすれば、その研究対象である外国人たちが、明治政府に協力し、日本の近代化のために貢献した「親日的」外国人であるという予断のもとになされ、その枠組のなかでのみ、その外国人たちの諸活動を切り取って「解釈」してきた。ところが、たとえば日本の地方制度改革を請け負ったアルベルト・モッセ（1846-1925）の書簡集のなかでは、モッセと日本の内務官僚たちとの激しい対立が活写されており、しかもそれは、プロイセンの地方自治制をさらに拡充して、日本の自治の確立・強化を目指したモッセと、自治の抑圧を意図する明治政府との宥和なき原理的対立であった。こうした対立は、モッセと親しかったカール・ラートゲン（1856-1921）をはじめとする滞日ドイツ人社会科学者たちにも顕著に認められる。従来言われてきた「御雇」たちの説く「独逸学」を日本人が学んでいたというシェーマは、その日独学術交流の実相とは程遠いものだったのである。

したがって、明治政府および東京大学（帝国大学）の動向と、政府や大学に雇われていた外国人たちの動向とを区別して検証することが不可欠である。とくに、雇われた外国人の滞日時以外の事績の集積作業が、従来の研究では弱かったので、ここに力を入れる必要もある。

## ２．研究の目的

日本政府に雇われた外国人について、渡日前の事績や思想性と、滞日中のそれと、離日後のそれとを対比しつつ検証する作業をすすめる。そしてそこから、その外国人の活動の全体像を、またその外国人の日本観と彼自身のナショナリズムの所在を究明する。

さらに、ラートゲンらは、ドイツにおける社会学説・社会政策・社会科学の新しい潮流と結びながら日本で活動している。そこで、ドイツ社会科学にかかわる当時焦眉だった諸課題を究明し、それと関連づけながら、ラートゲンや、その同僚だったマックス・ヴェーバー（1864-1920）らの活動を再評価する。

また、たとえば金井延（1865-1933）のように、東京大学（帝国大学）でラートゲンに学んだ後、渡独してグスタフ・シュモラーやヨハネス・コンラートに学び、またカール・メンガーとも知遇を得て、その経験を帰国後の研究・教育活動に結びつけた例もある。このように、日本で教鞭を執ったドイツ人の活動や、独墺に留学した日本人留学生の活動が、日本における社会学説形成と社会科学方法論研究にとって、また日本における社会学の成立にとって重要な意義を有している。

本研究組織は、こうした重要史実の検証作業によって、日独における社会学説研究・社会科学研究が、両国それぞれの歴史的定位に応じた独自の展開過程を経ていることが浮き彫りになると考え、本研究課題を遂行した。

## ３．研究の方法

本研究組織は、日独比較の視座と射程のもとに、日独社会科学交流史と日独大学史とに焦点を当て、埋もれていた資料を発掘し、日独における社会学史・社会科学史・大学史の理解の豊富化を果たそうと努めてきた。とりわけ、ラートゲンやヴェーバーらの大学問題にかかわる活動や、ヴェルナー・ゾンバルト（1863-1941）の著作にたいする当時の論調などについては、知られていない事項が多く、またそれ以上に、彼らの活動にかんする初歩的な事実誤認も少なくないので、第一次史料の調査と稀覯文献の読解・検討に力を入れた。

こうした史料分析結果、稀覯文献読解結果に依拠し、研究組織メンバーがそれぞれ考究し、また組織内研究会においてそれを共有し、さらに、ドイツ人研究者を含め、組織外のヴェーバー研究者、ドイツ大学史研究者、日本近代大学史研究者等とのディスカッションの場を設け、研究の深化を図った。

## ４．研究成果

### (1)　個別の研究成果

#### ①　ラートゲン関連調査の成果

ラートゲンの滞日書簡のなかには、その時々の政治にかんする記述が少なくない。たとえば1889年5月27日付書簡からは、渋沢栄一邸に集った井上馨・青木周蔵らが、自治政研究会を母体とする政党組織を編成し、来たる総選挙に備えようとしていた様子を窺うことができる。しかしこの動きは伊藤博文らによって封じられており、この伊藤にたいするラートゲンの評言をみ

ると、渡日以降、年を追うごとに低い評価に変化している。このことが、ラートゲンの離日理由の小さくない部分になったことは確実である。またこれは、渡日以前の彼の反ビスマルク姿勢と重なっている。

② 日本人留学生関連調査の成果

主要な研究対象である人物のうち、テンニースに直接研究指導を受けていた社会学者・上西半三郎（1886-1960）の足跡が明らかになってきた。とくに、新聞社特派員として駐在する傍ら、1913 年秋からキールでテンニースに師事していた上西が、翌年の第一次世界大戦の勃発によって、戦況の調査に専念することになり、そのためテンニースの許を離れてヨーロッパ各地を巡っていたことが判明した。

③ 初期帝国大学とその周辺事情にかんする調査の成果

初期帝国大学の諸制度やその理念について、森有礼文相期および彼の暗殺後の動向を点検し、とくに井上毅文相期（1893-1894 年）にまで射程を広げた。親戚関係にもある井上毅―木下広次（後の京都帝大初代総長）という熊本人脈が、森有礼と必ずしも対立的ではなく、単純な「熊本閥」「薩摩閥」の枠組が当てはまらないとの仮説を得た。また、井上や木下がフランス留学組であることも重視し、彼らの大学観が制度にどのように反映したのかを考察した。それとともに、民間の知識人・田口卯吉や福沢諭吉の帝国大学観についても考察し、外から見た帝大という視点から、帝国大学の位置づけの再点検を進めた。
また、慶應義塾のほか、五大法律学校（東京法学校・専修学校・明治専門学校・東京専門学校・英吉利法律学校）と帝国大学との関係について考察を進めた。1886 年に帝国大学が誕生すると、これらの学校は、私立法律学校監督条規によって、優等卒業者の司法官僚への無試験登用を認められ、同時に帝大総長の監督・統制下に置かれた。さらに翌年、特別認可学校規則によって、高等文官試験の受験資格と普通文官への無試験入学が認められるかたわら、文部大臣の監督・介入がなされるようになった。このような動向が独逸学化の一環として捉えられてきた点について再検討を加えた。

④ マリアンネ・ヴェーバー関連調査の成果

マックス・ヴェーバーの妻マリアンネは、帝政期ドイツにおける市民女性運動の担い手の一人である。バーデン憲法制定国民議会初の女性議員となった彼女は、リベラル・デモクラシーの立場から女性参政権と女性の政治参加の意義を論じた。また、帝政期の自然科学的言説に内在する優生学的関心、およびその影響を受けた母性保護連盟の動向を、「自然」と「倫理」を峻別することで、事実と規範の区別を重視する新カント派的立場から批判した。この点は、価値自由と科学の客観性をめぐる夫マックスの方法論研究との関連もある。
さらに、彼女の初期の研究は、H・リッカートらの新カント派哲学、夫マックスらの国民経済学の影響を受けているとともに、経済的自由主義の弊害を批判したＪ・G・フィヒテから、労働権と生存権と人間の権利への倫理的関心を抽出したものでもある。これらの検証作業により、当時のドイツ哲学や社会科学の思想圏域との接点をもった女性たちが、そこで培った知見を、女性運動を支えるための理論へと発展させていく様相の一端を解明した。

⑤ 社会科学と法学との交渉にかんする調査の成果

十九世紀末から二十世紀前半にかけて、社会進化論や人種理論と結びついた有機体的国家論が広がり、他方でルドルフ・シュタムラー（1856-1938）らによる自然法の再興を契機とする観念論的国家論が登場していた。この状況下で伝統的な国家学が再編されていき、この過程を通じて二十世紀のドイツ社会科学が形成されてきたという構図を明らかにした。
また当時の文献に依拠して、ドイツ社会科学者たちの立論の分析を進め、とくに計量テキスト分析を導入して、当時のドイツにおける学問状況の計量的な評価を実施した。

⑥ ゾンバルト関連調査の成果

ヴェルナー・ゾンバルト（1863-1941）のユダヤ人観の背後にある金融制度の認識について研究を進め、とりわけその内容がイギリスの銀行家の異端的貨幣論の系譜を引いている可能性を確認した。具体的には、ヘンリー・ダニング・マクラウドの影響があること、またゾンバルトと旧知の関係にあるフランツ・オッペンハイマーが監修してラルフ・ホートレーの『通貨と信用』が訳されており、これがゾンバルトの『盛期資本主義』と何らかの関連をもっている可能性があることなどである。両者とも、貨幣の起源を「債務」に求めており、その起源を物々交換における「欲望の二重の一致」の困難の解消に求める通説とは異なっている。
オッペンハイマーとのやりとりについても注目すべき点があった。フランクフルト大学の法学経済学図書館において、ゾンバルト『ユダヤ人と経済生活』（1911 年）初版本に挿入されてい

た当時の宣伝パンフレットを閲覧し、彼と親交の深かったオッペンハイマーの書評の一部が、この本の好評を伝えるものとして多数使われていることを確認している。彼は、先行研究においてゾンバルトのこの本について批判的な言及もしていることが知られているが、このパンフレットにより、オッペンハイマーのゾンバルトにたいする姿勢が矛盾を含んだ複雑なものであることが明らかとなった。

⑦　ヴェーバーとアルトホフとの確執にかんする調査の成果

ベルリン大学私講師だったヴェーバーが、1893 年春にフライブルク大学から招聘されようとしたとき、プロイセンの文部官僚フリードリヒ・アルトホフ（1839-1908）は、この俊英が他国（バーデン）へ流出するのを阻止しようとして、さまざまな奸計を巡らし、ヴェーバーとの間に激しい紛糾を引きおこした。そしてヴェーバーは、ようやく一年後にフライブルク赴任を果たすことになる。しかしこうした事実関係は、従来正確に理解されておらず、しかもこの事件の経験が、ヴェーバーの後年の官僚制論等の研究に直接に結びついていることも見逃されている。

関係史料を考証した結果、この事件は、ベルリン大学私講師レーオ・アーロンスが社会民主党に入党して活動していることを咎めたプロイセン政府が、シュトラースブルク大学からパウル・ラーバントを招いて、アーロンスを大学から追放する法的措置を考案させようとし、このラーバント招聘がまとまるまで、ヴェーバーをベルリン大学法学部で臨時に使役しようとしたという構図だと判明した。そしてラーバント招聘工作に難渋した（それは結局失敗に終わる）アルトホフが、ヴェーバーのバーデンへの流出を強引に先延ばしにしていたことを解明した。

⑧　大塚久雄の戦前期の言説にかんする調査の成果

戦前期の日本の社会科学者について、主として大塚久雄の動向について取り上げ、彼が戦前期に書いたヴェーバーにかかわる論考を、戦後に修正していた事実を確認したうえで、その内容がヴェーバーの近代認識にたいするヘーゲル主義的立場からの批判であることを明らかにした。つまり、ヴェーバーは、資本主義の Gewordensein（生成後の状態）だけを観察しているにすぎず、その Werden（生成）における矛盾とその止揚の可能性を捉えていないと批判していた。同時に、大塚においてはこの認識がヒトラーへの積極的評価と大きく関係していた。「資本主義と市民社会」（1944 年）中には、そうした現代資本主義における矛盾を止揚する主体の Werden をヒトラーが看破していたかのような記述があり、その記述が戦後に削除されていることを確認した。

⑨　『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の再検討の成果

ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の精緻な解読を試みた。日本で『倫理』が受容された当初から、これは宗教が資本主義を生成・発展させたことを主張した著作だという誤解がつきまとってきた。こうしたヴェーバー誤読は、ドイツやアメリカでも見られる。そこで、この問題をめぐって再読・再検証を進め、ヴェーバーが問題としたのは、禁欲的プロテスタンティズムに媒介された近代人の生活態度 Lebensführung が何をもたらしたかという問題であり、彼は宗教倫理と資本主義の成立とを直結しているのではないことを明示した。とくに、近代人の「機械的硬直化」という概念の考証をおこない、近代人の生活態度は、合理的であるとともに同時に非合理的であり、近代人はそれを身につけることを強いられ、引き裂かれる。この有様が「機械的硬直化」と表現されていることを解明した。

（2）　研究成果のまとめと今後の課題

われわれは、第一次史料の発掘と稀覯文献の読解・検討とによって、大学をめぐる問題状況を明示し、これまで知られていなかった重要史実の実相を解明した。また周知の著作の見過ごされてきた重要側面の再検討によって、その著作の歴史的定位に新たな地平を拓いた。本研究組織の活動は、上記の成果に実を結び、さまざまな方面の史実究明に貢献した。

これらの成果から、重要な課題がみえてきた。ドイツ社会学における公共性の歴史的起源に当たる十八～十九世紀の市民社会における担い手であった教養市民層の後裔である社会科学者たちが、十九世紀末から二十世紀前半にかけて、さまざまな潮流に分化・分裂し、また論争問題を引き起こしながら、社会科学の方法的規準は何か、科学と政策とはどのように区別されながら関係づけられるべきか、社会科学は国家をどう捉え、国家とどう対峙するかといった根本問題へと迫っていく。そしてこの問題は、ラートゲンらの滞日ドイツ人学者たちによって、またドイツに渡った日本人留学生たちによって、日本の近代の問題へと移し替えられていく。この展開過程を克明に考証したい。

また、五大法律学校だけではなく、井上毅らと関係の深かった独逸学協会学校専修科および文部官僚辻新次の関わった東京仏学校について、特別認可学校規則やドイツ系外国人教員との関係から検討していくことも重要で、調査対象を広げる必要がある。

今後、本研究課題の成果に依拠して、日独の知識社会がどのように関連づけられていたのか、

**またその人脈にはどのような特徴があるのかを解明し、さらにそこにどのような問題性が顕在化していたのかを究明し、十九世紀末から二十世紀前半にかけての両国の知識社会の史的構造を解明し、そこから日独近代社会史を鳥瞰する包括的成果を積み上げたい。**

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計18件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>鈴木宗徳、恒木健太郎、内藤葉子、橋本直人、太子堂正称、三笘利幸、野崎敏郎 | ４．巻<br>763 |
| ２．論文標題<br>マックス・ヴェーバー没後100年シンポジウム　学知の危機とマックス・ヴェーバー―科学主義と反知性主義を超える― | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>大原社会問題研究所雑誌 | ６．最初と最後の頁<br>49-62 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>内藤葉子 | ４．巻<br>707 |
| ２．論文標題<br>マリアンネ・ヴェーバーにおけるフィヒテの社会主義論―労働権と生存権および人間の権利への関心― | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>理想 | ６．最初と最後の頁<br>78-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>三笘利幸 | ４．巻<br>58(2) |
| ２．論文標題<br>「機械的硬直化」する近代人―「資本主義の機械的化石化」という解釈から『倫理』論文を解放する― | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>立命館産業社会論集 | ６．最初と最後の頁<br>37-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.34382/00017761 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>橋本直人 | ４．巻<br>16(1) |
| ２．論文標題<br>マックス・ウェーバーと〈意味〉の地平―科学主義とシュタムラー法哲学とのはざまで― | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 | ６．最初と最後の頁<br>73-82 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>橋本直人 | 4．巻<br>46 |
| 2．論文標題<br>『マックス・ウェーバー』（野口雅弘著）・『ヴェーバー入門』（中野敏男著） | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>社会思想史研究 | 6．最初と最後の頁<br>215-220 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24546/0100476855 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>野崎敏郎 | 4．巻<br>75 |
| 2．論文標題<br>マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（4・完） | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>佛教大学社会学部論集 | 6．最初と最後の頁<br>55-78 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>野崎敏郎 | 4．巻<br>76 |
| 2．論文標題<br>〈資料の紹介と研究〉マックス・ヴェーバーのフライブルク大学移籍をめぐって―人事の実相への補遺― | 5．発行年<br>2023年 |
| 3．雑誌名<br>佛教大学社会学部論集 | 6．最初と最後の頁<br>43-66 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>内藤葉子 | 4．巻<br>21 |
| 2．論文標題<br>ドイツ市民女性運動と女性の政治参加―帝政期からヴァイマール初期にかけてのマリアンネ・ヴェーバーを中心に― | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>政治思想研究 | 6．最初と最後の頁<br>131-163 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>野崎敏郎 | 4．巻<br>73 |
| 2．論文標題<br>マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（2） | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>佛教大学社会学部論集 | 6．最初と最後の頁<br>29-52 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>恒木健太郎 | 4．巻<br>45 |
| 2．論文標題<br>書評：『大正デモクラットの精神史―東アジアにおける「知識人」の誕生―』（武藤秀太郎著、慶應義塾大学出版会、2020年） | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>社会思想史研究 | 6．最初と最後の頁<br>207-210 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>鈴木宗徳 | 4．巻<br>26 |
| 2．論文標題<br>コロナ禍に隠された「分断」に目を凝らす―生権力を下から統御するため― | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>唯物論研究年誌 | 6．最初と最後の頁<br>8-30 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>恒木健太郎 | 4．巻<br>64(1) |
| 2．論文標題<br>書評：『大塚久雄から資本主義と共同体を考える―コモンウィール・結社・ネーション―』（梅津順一・小野塚知二編著、日本経済評論社、2018年） | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>歴史と経済 | 6．最初と最後の頁<br>56-58 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>恒木健太郎 | 4．巻<br>58(3) |
| 2．論文標題<br>書評：『19世紀前半のドイツ経済思想―ドイツ古典派、ロマン主義、フリードリヒ・リスト―』（原田哲史著、ミネルヴァ書房、2020年） | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>季刊経済理論 | 6．最初と最後の頁<br>89-91 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>斉藤史朗、佐藤典子、橋本直人、渡曾知子、出口剛司 | 4．巻<br>43 |
| 2．論文標題<br>今、学説史研究の未来と可能性を考える | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>社会学史研究 | 6．最初と最後の頁<br>19-40 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>橋本直人 | 4．巻<br>15(2) |
| 2．論文標題<br>マックス・ウェーバーの理論的変化に関する計量テキスト分析の試み | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 | 6．最初と最後の頁<br>91-107 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.24546/81013205 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>内藤葉子 | 4．巻<br>17 |
| 2．論文標題<br>帝政期ドイツにおける性をめぐる科学的言説と女性の主体性―マリアンネ・ヴェーバーの〈自然〉概念批判に関する一考察― | 5．発行年<br>2021年 |
| 3．雑誌名<br>ジェンダー史学 | 6．最初と最後の頁<br>35-48 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.11365/genderhistory.17.35 | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>恒木健太郎 | 4．巻<br>705 |
| 2．論文標題<br>貨幣・信用理論史研究の現状とドイツ経済思想史との関係について―古川顕『貨幣論の革新者たち―貨幣と信用の理論と歴史』（ナカニシヤ出版、2021年）をめぐって― | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>専修大学社会科学研究所月報 | 6．最初と最後の頁<br>17-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| 1．著者名<br>野崎敏郎 | 4．巻<br>74 |
| 2．論文標題<br>マックス・ヴェーバーにかかわる二つの人事の実相―フライブルク大学移籍とハイデルベルク大学正嘱託教授案件―（3） | 5．発行年<br>2022年 |
| 3．雑誌名<br>佛教大学社会学部論集 | 6．最初と最後の頁<br>21-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| 1．発表者名<br>鈴木宗徳 |
| 2．発表標題<br>直接行動を考えることによって公共性論を鍛えなおす |
| 3．学会等名<br>日本社会学理論学会第17回大会シンポジウム「公共圏の可能性と限界」 |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| 1．発表者名<br>内藤葉子 |
| 2．発表標題<br>第一次世界大戦とドイツ市民女性運動―戦争協力か平和主義の追求か― |
| 3．学会等名<br>大阪公立大学女性学研究センター第26期女性学講演会 |
| 4．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>田中智子 |
| ２．発表標題<br>明治期における専門・高等教育機関設置地としての岡山―地域利益の段階的変容― |
| ３．学会等名<br>全国地方教育史学会第44回大会シンポジウム |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Kentaro Tsuneki |
| ２．発表標題<br>"Becoming (Werden)" and "Being of Having Become (Gewordensein)": Criticism of Max Weber in Japan during WWII |
| ３．学会等名<br>Symposium: Globalizing the Social Sciences German-East Asian Entanglements in the 19th and 20th Century |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>内藤葉子 |
| ２．発表標題<br>性・性愛・科学―〈自然〉に対するマリアンネ・ヴェーバーの批判的視座の射程― |
| ３．学会等名<br>マックス・ヴェーバー没後100年シンポジウム「学知の危機とマックス・ヴェーバー―科学主義と反知性主義を超える―」 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>橋本直人 |
| ２．発表標題<br>マックス・ヴェーバーと〈意味〉の地平―科学主義・シュタムラー・ドイツ社会学の間で― |
| ３．学会等名<br>マックス・ヴェーバー没後100年シンポジウム「学知の危機とマックス・ヴェーバー―科学主義と反知性主義を超える―」 |
| ４．発表年<br>2021年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>恒木健太郎 |
| ２．発表標題<br>戦時下大塚久雄のマックス・ヴェーバー批判―出口勇蔵との関連で― |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>三笘利幸 |
| ２．発表標題<br>「機械的化石化」をめぐって―日本における『倫理』論文受容の問題― |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>野崎敏郎 |
| ２．発表標題<br>カール・ラートゲンと東京大学・帝国大学の学生たち |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」 |
| ４．発表年<br>2022年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>田中智子 |
| ２．発表標題<br>田口卯吉・帝国大学・ラートゲン―明治期大学史の複眼的理解に向けて― |
| ３．学会等名<br>シンポジウム「近代日独社会科学者たちの知的交流とその時代―ヴェーバー没後百年、ラートゲン没後百年記念シンポジウム―」 |
| ４．発表年<br>2022年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究分担者 | 田中　智子<br>(Tanaka Tomoko)<br>(00379041) | 京都大学・教育学研究科・教授<br>(14301) | |
| 研究分担者 | 恒木　健太郎<br>(Tsuneki Kentaro)<br>(30456769) | 専修大学・経済学部・教授<br>(32634) | |
| 研究分担者 | 鈴木　宗徳<br>(Suzuki Munenori)<br>(60329745) | 法政大学・社会学部・教授<br>(32675) | |
| 研究分担者 | 三笘　利幸<br>(Mitoma Toshiyuki)<br>(60412615) | 立命館大学・産業社会学部・教授<br>(34315) | |
| 研究分担者 | 内藤　葉子<br>(Naito Yoko)<br>(70440998) | 大阪公立大学・大学院現代システム科学研究科・教授<br>(24405) | |
| 研究分担者 | メンクハウス　ハインリッヒ<br>(Menkhaus Heinrich)<br>(70515915) | 明治大学・法学部・専任教授<br>(32682) | |
| 研究分担者 | 橋本　直人<br>(Hashimoto Naoto)<br>(80324896) | 神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授<br>(14501) | |

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |